

◆タイトル

元料理人がボロボロで廃業寸前の料亭の女将のピンチに「業務拡張するから、従業員全員引き取ろうか？」→「お礼に私の身体を引きとって♡」

—————

主人公はもと料理人で、今は経営者として飲食店を複数経営している。

今、次の事業展開として、新店舗を出すか、既存店舗のクオリティ向上させるか迷っている状態。

行きつけの料亭へランチを食べに行こうと向かう。

個人経営の小さな料亭だが、料理がとても美味しく、地域の人からは評判の良いお店だ。

主人公はこの料亭で、学生時代はアルバイト、卒業後は料理人として修行するために働いていた。

今は先代から代替わりして、娘が女将として料亭を盛り立てている。

女将とは修行時代からの旧知の仲で、主人公は昔は彼女を妹みたいに思っていたけれど、今はちょっとした恋心を抱いている。

店内に入ると、普段と異なり席がほとんど空いているのを見て、いつもの賑わいとの違いに違和感を覚える主人公。

店の中で、女将が客と会話しているものの、女将の反応は明らかに嫌悪感を示している。

女将の困っている様子を察して、主人公が状況を尋ねる。

邪魔が入ったとでも言いたげに不満そうな顔をする客。

客に話している内容が何かを尋ねる。

主人公が現れたことで厳しい状況になり、女将に対して「私の言う通りにした方がいい」という趣旨の言葉を残して去る客。

主人公が女将に、「何があったんですか？」と尋ねる。

女将は、先ほど立ち去った客が飲食業を幾つか手がける経営者であり、スタッフを引き抜くなど妨害をしており、料亭を助ける条件として自身との結婚を要求してきたことを主人公に明かす。

だが、了承しない限り料亭が閉店の憂き目に遭うので、途方に暮れて涙が止まらない。

先代に大変お世話になったため、主人公は女将のために何かしたいと考えているが、具体的な方法が思い浮かばない。

その瞬間、新しい店の開店計画を頭に浮かべ、女将に向けて「私たちの会社にみんなで来ませんか？」と提案した。

主人公が率いる企業が、この危機に直面している料亭を取得し、それを自社の新店舗として立ち上げ、さらに料亭で働いていた人々を全員雇うことにする。

自分からは結婚を強制しない。料亭を守りたい女将にとっても有益な提案だと思う。

女将がそれを聞いて、「ありがとうございます、主人公さん。この恩は一体どうやってお返しすればいいのかしら…」と嬉しそうに言った。

主人公は料亭を救いたいという思いがあり、新店舗の問題も解決できるため問題ないと述べた。

女将は、「何もお礼をしないなんて、私には耐えられない」と述べ、「お礼に私の体、好きにしていよいよ」と言いつつ、徐々に服を脱ぎ始めた。

気になる女性の予期せぬ下着姿に遭遇し、顔を真っ赤にして、主人公は困惑しながら彼女に服を着させようとします。

どうして、急にこんなことをと聞くと、女将は今の自分ができるお礼はこれだけだからと答えた。

それは大切な人とするもので、今はそんなことしなくていいから！とできるだけ見ないようにして女将に言う主人公。

それに対して、少し不満げな様子をうかがわせながら服を着る女将。

それから何ヶ月か経過した。
料亭は新しい従業員も採用して、主人公の会社の新しいお店になった。

売上と来店客が持ち直してきていることを嬉しく思い、女将は主人公のおかげで料亭を続けられると感謝した。

そこへ敵社長が妨害をしてくる。

女将が自分に好意を持たなかったために逆恨みし、彼女に自分との結婚を拒否したことを後悔させるべく、従業員に嫌がらせを行わせていた。

彼らは些細な言い掛かりをして、大声で騒ぎ、オンラインレビューサイトで根拠のない低評価を繰り返し、営業妨害をしてくる。

あからさまに悪意を感じる出来事に
主人公は女将へ好意を持っていた敵社長が関わっていることを疑う。

それへ自分が悪いと落胆している女将へ
女将は何も悪くないと元気づける。

主人公の暖かい言葉に、女将は前向きな気持ちを取り戻す。

主人公は他のお店の経営もあるので、
料亭にずっとはいられないが、できるだけ訪れるようにしていく。

女将と従業員は迷惑客を上手に対処していった。
妨害が上手くいかないことに焦れなくなった敵社長がやってくる。

準備中なので、食事なら後で来て下さいという女将へ、
こんなお店の料理を食べるわけないだろうと不機嫌に答える。

あの話を考え直さないか？と敵社長が女将へ言う。
まだ今ならやり直せる。
低評価や迷惑客もなくなるんじゃないか、と脅迫してくる。

主人公まで巻き込みたくないと女将は迷う。

主人公はそんなことをする必要はないと女将を止める。
敵社長へ黒幕はあなただと言う。

敵社長は何を根拠にそんな言い掛かりをつけるのかと怒る。
それにたいして、主人公は証拠を突き出した。

主人公は敵社長が迷惑行為の指示をしていた証拠を手に入れていた。

主人公は一般客に扮して、迷惑客の迷惑行為をしている映像を撮影した。
迷惑客へ映像を見せて、警察へ業務妨害として相談すると言う。

迷惑客は警察には言わないでほしいと懇願する。

主人公は誰の指示でやったのか、正直に話して、証拠を手に入れる協力をしてくれれば、警察には言わないと迷惑客へ言う。

迷惑客達は敵社長の指示するところを隠れて録画してくれていた。

はっきりとした証拠を見せられ、追い詰められた敵社長は
許してくれ！この店にはもう手を出さない。何でもするから。
と主人公達へ哀願する。

だが、女将は私たちが許す許さないの判断はできない。
敵社長がやったことは完全に犯罪行為であり、
警察がこちらに向かっていると伝える。

威力業務妨害と脅迫の罪で、敵社長は警察に逮捕された。

敵社長逮捕のニュースが一般に知れ渡り、
敵社長の会社は業績不振になり、倒産したとのこと。

今、訴訟対応に四苦八苦しているらしい。

その一方で、主人公の経営するお店は順調に成長し、全部のお店が繁盛している。

女将は主人公に
私たちの料亭を助けてくれた経験を活用して、困っている飲食店をサポートする新事業をするのはいかがでしょうかと提案する。

やれるかなと心配げな主人公に
私たちの料亭を守ってくれた主人公ならできると力づける。

そのサポート事業が大成功し、マスコミの取材を受ける等、有名になる主人公。

女将は料亭を助けてくれてありがとう。
あの時はどうしたらよいかわからなかったとお礼を言う。

女将はさらに
主人公さんが好き
料理人として料亭で修行していた時から恋心を抱いていた。

でも、あの時は振り向いてもらえなさそうと、
思いを伝えていなかった。

でも、料亭を助けてくれると言ってくれた時、
私にはあなた以外考えられないと確信した。

あの時、あんな大胆な行動をしたのは、
主人公さんとなら本当に好きにされてもいいと思っていたから。

他の人だったらあんなことはしないと、気持ちを打ち明ける。

思いがけない告白に主人公は動揺する。

主人公は女将が自分に好意を寄せていたことを知って、とても嬉しく思った。

主人公は女将を自分もずっと好きだった。
あなたの笑顔がいつも自分を救ってくれた。
これからは一緒に料亭と会社を守っていきたいと伝える。

そして、二人は結婚前提で付き合い始めた。
一緒に暮らし始めたことで、お互いの仲を順調に深めている。